

大根引く谷の畑に老いにけり

秀一

大根を畑から引き抜いている光景に出会った。その収穫が農業としての作業であるか、自家用菜園の作業であるかは別として、作者の目には、その人がその畑に馴染み、定着した存在として映ったのである。住み慣れた谷あいの地にしっかり足をつけた生活を長く続けていくものとして、作者の心象が形成されたのである。ここで提示された「畑に老いる」との把握は、簡明にして的確である。この句では「谷」を「やつ」と発音することによって、情趣がさらに深まる。

雲のなき空から散りし木の葉かな

秀一

散るのは木の葉であるから、当然、木の葉の散り元は木の枝、梢である。でも、そうだからといって「木の枝から散りし木の葉」としたのでは、理屈そのものであって、良い俳句にはならない。作者は、風によって空に舞い上がった木の葉が降ってきたことを詠んだのである。しかも、その空は「雲のなき空」である。「青空から舞い落ちる木の葉」とすることによって、すなわち、「木の枝、梢」と「木の葉」との間に「青空」を媒介させるという、俳句的处理を施すことによって、揺るぎない優れた叙景句が得られたのである。

息きらしたどる社や神の留守

友子

「たどる」という動詞を使えば、神社は通常複数なのであろう。当日の神社は舞岡八幡宮一箇所だけであるから、「たどる」ではなく「参る」となるのであろう。しかし、作者は複数箇所の神社を、それこそ息を切らしながら回った句に仕立てた。この操作によって、「息を切らしながら折角、神社を何箇所も回ったのに、どの神社も目的の祭神はいなかった」という、ある種の諧謔性が出て来る。実景から少し離れた情景に設定変更することによって、俳句として成功したのである。

吟行は、俳句の素材を探し求める行程であって、俳句そのものを求めるのではないということ、すなわち、確信の得られた素材を発見したら、それからジャンプして一句を完成する行程なのである。得てして、この飛躍の方向を間違えると、他者には理解困難な句に陥る。しかしながら、実景そのものを巧みに写し取っても、それは単なる説明や報告の句に墮し易いから、秀句を得るためには、冒険を試みると良い。

街近く広くかがやく冬田あり

眞三

この句は、真正面から実景を詠んだものである。郊外といえども、住宅地に接近して意外にも広々とした田が残されている事実、かつ、それが冬日を存分に受けている様子を、「広くかがやく冬田あり」と言い切ったのである。「広くかがやく」という修辞を用いることによって、叙景句として成功したのである。

短日や電車の遅れ心急ぐ

ヤエ子

当日、人身事故のため、相鉄線の電車はダイヤが相当乱れていた。遅れて入線した電車に飛び乗ったのは良いが、その後の少し走っては直ぐ止まる電車に、作者は「心急ぐ」ばかりである。吟行は、目的地に着いてからだけではない。家を出てから家に帰り着くまでの全部の時間が吟行なのである。この意味で掲句は正真正銘な吟行句である。

季語の「短日」と「心急ぐ」は、つきすぎの感じもするが、作者の実感が如実に表れているから、許容される限界かとも思われる。このダイレクト感のある「心急ぐ」の代わりに、「拡大す」、「おさまらず」というように、別の動詞を置いて試して見るのも良い。

綿虫を吹きつ真中を抜けにけり

友子

実景としては、小流れの水面に群がって飛んでいた羽虫は、おそらくは、まくなぎ（めまとひ）であったかも知れないが、作者は、前記した「確信の得られた素材を発見したら、それからジャンプして一句を完成する」に依ったのかも知れない。

その場合でも、「吹きつ」は「吹きつつ」とすべきであろう。そうすると、「真中を」の「を」を消して、「綿虫を吹きつつ真中抜けにけり」となる。

文謝々

会場・舞岡地区センター

文責・増田 守

幹事の友子さんの入念な下調べとご手配によって、また、幸運にも天候に恵まれ、久々の吟行句会を楽しく終わることができました。私も、「枯れゆく音に遊びけり」という、机の上では思いつかないフレーズが、天から舞い降り、収穫大の吟行句会でした。来年も機会を選んで吟行句会を開ければ良いと思います。

十二月の定例会は第三日曜日の十二月十九日開催となりますので、奮ってご参加下さい。